第10回 交通バリアフリー推進勉強会
東日本大震災と被災地の障害者

小山　賢一
みやぎ盲ろう児・者友の会

〈見え方・聞こえ方〉

①見え方

右目は光を感じる程度。

左目は上と左側の視野がなく、右上から真ん中にかけても見えない部分がある。

真ん中の少し右側の小指の爪くらいの部分と、真ん中左側の部分の視力を活かして生活している。

②聞こえ方

両耳ともに先天性の感音性難聴で、中程度の難聴。

左耳に集音器を装着する場合あり。

震災発生時の状況

- 自宅は海から直線距離で200m程度。
-
- 大地震の発生時は、一人で自宅の部屋にいた。
- 部屋では激しい揺れがなかなか収まらず、動くことができなかった。建物が倒壊するかもしれないような揺れ方が長く続いたので「このまま（私も）終わってしまうのかなあ。」という気持ちになりながら耐えた。とにかく、これでもかというくらい容赦なく揺れた。

  まるで大地が怒り狂っているかのようだった。
- 地震発生直後に停電し、防災無線も入らず、固定電話もつながらず、携帯電話も不通。

  ラジオでさえも電波の届きにくい環境で使えない状況だった。

避　難①

- 地震や津波に関する情報がないなかで、避難に向けて動いた。
- 過去に何度が津波の経験がある地域で、防災訓練は子供の頃から地震と津波のセットで行われていた。
- あれだけの尋常ではない揺れ方で、津波の経験のない私でさえ、このあとに津波がくることは間違いないと直感した。
- ただし、実際の津波の規模や到時刻などは想像できなかった。地震発生からどれくらい時間が経過していたかもわからなかった。

避　難　②

- 私が視覚障害者であることは地域の方々は知っていたので，地域の消防団の方が見回りにきてくれたと後から聞いた。しかし難聴のため、呼び掛けが聞こえず、すれ違った可能性がある。
- すぐ裏山は避難場所にもなっていたが、その先は山が荒れているため、一人での避難は困難と判断し、歩いて10分はかからないくらいの安全なルートから避難所になっている保育所への移動を考えていた。
- 揺れが一時的に収まったタイミングで避難しようと外に出た時、父が車で迎えに来てくれた。
- 一人で避難していたら津波到達までに間に合ったかどうかわからない。

津　波

- 高台に避難しても大きな揺れは何度も続いた。
- 私が避難して間もなく大津波が地域を襲った。
- 津波目撃者が興奮した様子で「全滅！」を何度も連呼していた声や姿は今も脳裏に焼き付いている。
- まさかの夢のようで、全く実感がなかった。
- 自宅は土台のみを残して庭の木も含めて全壊流失。
- 15mとも言われる大津波は近くの小学校の屋上にまで達した。
- 押し寄せる津波は、じわりじわりと浸水するようなものではなく、まさに襲うように直撃した。
- 第一波よりも第二波、第三波の方が凄かったと目撃者から聞いた。
- 漁港の堤防は跡形なく崩壊し、国道の橋まで津波でもっていかれた。

避難所生活①

- 避難所になったのは、その年の春に新しく移転開所予定だった高台にある保育所。
- 高台に避難した時から雪が降り、とても寒かった。
- 震災発生初日は、100人以上の避難者が集まった。自宅が助かった人も余震の危険、安否確認、ライフラインが使えなくなったため、津波から難を逃れた人はみんな集まった。
- 避難所の耐震は震度7にも耐えられると聞いた。
- 徐々に人が増えて、多い時には200人を超えていたと思われる。
- 私の地域で助かった民家は、高台にあった約40軒。
  その他の50軒くらいは被災・流失した。
- 震災発生から一夜明けて、津波に襲われた地域はがれきしかなく、まるで戦争で爆撃を受けて崩壊したような凄まじい光景だったと伝え聞いた。
- 道路も寸断され、安否確認や地元に戻るにも徒歩だった。

避難所生活②

- ライフラインがストップしたなかで、私たちの命をつないだのは山水だった。山水を避難所に引いて使用した。
- ドラム缶を確保し、山から木を集めてお湯を沸かしたりしていた。
- 時間の経過とともに食料以外の日用品、衣服など、支援物資が届くようになった。何かが満たされると、やはり人間というのはそのことが当たり前の感覚になり、満たされないものが気になった。
  普通の衣食住ができるようになるまで、そんな感覚は続いたように思う。
- 食事ができる、箸や食器で食べる、畳や居間に座る、歯磨き、洗髪、入浴、着替え、布団での就寝、プライベート空間、お湯を使ったり飲む、電気、水道、ガス、電話、テレビ、日常にある、あげたらきりがない当たり前のものが一つ一つ幸せなことだということを身に染みて感じながらの避難所生活だった。

避難所生活で視覚障害者、盲ろう者、障害者として困ったこと

①自力での移動困難。
②トイレの不自由。(移動・利用が困難)
③水が自由に使えない。
④一日中同じ場所に座ったまま動けない。
⑤周りに助けを求められない。→遠慮、気遣い、状況認識できない。
⑥手が自由に洗えない。
⑦連絡が取れない。
⑧情報が得られない。
⑨日常の感覚を失い、何が必要か、欲しいかも分からなくなる。
⑩プライベート空間がない。
⑪周囲の目が気になる。→みんな極限状態で大変な時に自分だけという心苦しさ、迷惑かけてしまう気持ちとの葛藤。

避難所生活で救われたこと

(1) 近くの高台の完成したばかりの保育所が避難所になったこと
(2) 水があり、自然を活用できる人材と技術、環境があったこと
(3) 津波被害のない集落があったこと
(4) 震災発生時期→夜中・真冬・真夏だったら、状況は大きく変わる
(5) 桃生町から作業に来ていた土木会社がガソリン発電機を持っていたこと
(6) 食が継続できたこと
(7) 私が障害者であることを知っている人が多かったこと
(8) 家族の無事と支えてくれる人がいたこと
(9) 自宅近くの土地勘のある場所で避難所生活ができたこと
(10) 友人や知人が気にかけて声をかけてくれたり、支援してくれたこと
(11) 食料調達が難しい中、偶然にも私の誕生日にケーキの差し入れが届いたこと
(12) 近くの民家に災害時に有効な汲み取り式トイレがあったこと
(13) 発電機と井戸水で入浴させていただいたこと

多くの方の支えや地元の環境の中、避難所生活を無事乗り切ることができた

震災後の生活

- 約2ヶ月半以上にも及ぶ避難所生活後は、目が不自由でも感覚で移動ができた地域での生活環境を失い、引っ越し後は自宅から一人では出られなくなった。
- 自宅にいるだけの生活は、もちろん家族に支えられながらも、外に出る目的すら失いかけていた。
- 友人・知人とも離れ、交流の機会が激減した。
- そんな時、仙台市にある仙台市中途視覚障害者支援センターと出会い、相談をして、そこから様々な情報をいただき、仙台にある職業訓練校でパソコン訓練を受けた。点字も習い、視覚障害者仲間とも出会い、今もお世話になっている「被災地障がい者支援センターみやぎ」との出会いから、またいろいろな情報を得て、福祉サービスや社会資源を利用しながら活動がさらに充実してきた。拡大読書器の支援のおかげであきらめていた活字情報を再び見ることができるようになった。

移動環境について

- 今現在、仙台を中心に活動しているが、一番大変なのは移動手段、交通の便が悪いこと。
- 住民バスでは時間が合わず自由に往復ができない。
- 僻地で過疎化が進む地域に住み、震災後の環境変化で、車での移動でないと自由がきかない。
- 近くに頼る知人も少なく、バス停は比較的交通量が多い、歩道のない道路の2km先にあるため、一人では行けない。
- 自宅から石巻駅へのタクシー利用は、片道35km、1時間近くかかり費用負担も大きく利用できない。
- 石巻駅からの鉄道（仙石線）もまだ全線復旧していない。
  途中、バスへの乗り換えも必要。
- 自宅から2時間以上かけて仙台に出ると交通網や福祉環境が整備されていて単独で移動ができる場所もある。
- 地元では目的地に到着し、そこからまた離れるには、車が必要。

今後の活動

就職活動をしながら、盲ろう者としても「みやぎ盲ろう児・者友の会」の活動や点字訓練・情報機器の勉強、宮城県の福祉について学び、

活動の幅をもっと広げていきたい！

参加者のみなさまへ

震災だけでなく、日常においても自然災害は、いつ、どこで発生するか予測は困難です。

そのなかで視覚障害者は移動と情報取得、聴覚障害者は音声情報とコミュニケーション、盲ろう者は移動・コミュニケーション・情報取得、車椅子利用者は特に移動が自力では困難です。そのような方が皆さんの周りにいないかどうか、障害者の存在を知ってください。また関わる機会があれば一人でも少しでも関わってください。

障害者の避難には、やはり車は特に強力なアイテムです。移動のバリアフリー化についてアイディアをどんどん出し、

私たち障害者の移動におけるバリアフリー化がもっと社会に広がるよう、ご支援とご協力をお願いします。